

熊本県水俣・芦北地域における サラダたまねぎ「サラたまちゃん」の取り組み

熊本県あしきた農業協同組合

サラたまちゃん部会

部 会 長 田 畑 和 雄

○「サラたまちゃん」とは

図1. 芦北地域位置図

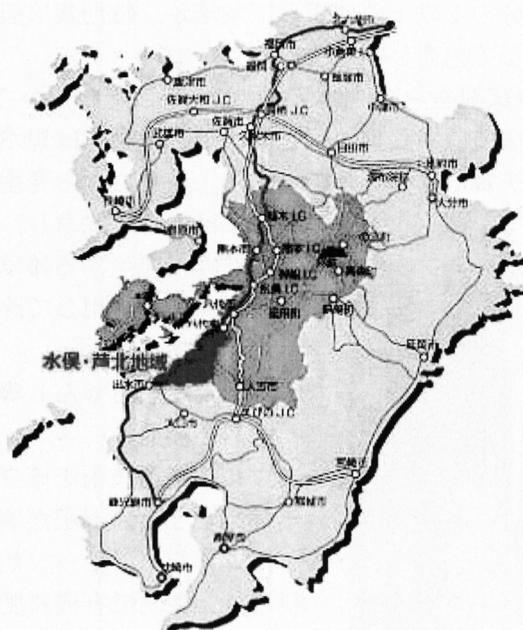


写真1. サラたまちゃん



熊本県の最南部、鹿児島県と隣接する水俣・芦北地域（図1）では、温暖な気候を生かし、早出したまねぎの栽培が盛んです（写真1、写真2）。超極早生・極早生・早生の6品種を駆使して、JAあしきた『サラたまちゃん』として2月中旬から7月上旬頃まで出荷が行われています。

みずみずしく辛味が少ないのが特徴で、サラダ用たまねぎとしてブランドの確立を図っています。また、青果だけでなく「サラたまちゃん和風ドレッシング」やタマネギ飲料「飲むサラたまちゃん」等の加工品（写真3、写真4）をJAで開発し、付加価値を高めて販売するようにしています。

写真2. サラたま籠入り



写真3. サラたまちゃん和風ドレッシング



写真4. 飲むサラたまちゃん



当地域の「サラたまちゃん」は昭和36年に水田裏作として生産者10名、栽培面積80aで栽培が始まりました。昭和57年には15haを突破し、県の指定産地に認定されました。平成7年にはタマネギ選果場が完成し、調整・出荷作業の省力化・合理化が実現しました。また、平成9年度の第3回全国環境保全型農業推進コンクールでは、意欲的な経営や技術の改善に取り組み、地域の活性化に寄与していることが高く評価され、農林水産大臣賞を受賞しました。平成15年度に、「タマネギ部会」から「サラたまちゃん部会」へと改名し、組織強化を図っています。

北は北海道から地元熊本まで数多くの試食宣伝会を実施し、生産者自ら「サラたまちゃん」のアピールをしています。平成20年産の生産状況は、作付面積56ha、生産者121名、出荷量2,600t、販売金額約3億円でした。

○栽培のこだわり

消費者の方に安心して食べてもらえるように、除草剤を一切使わず、環境に配慮した栽培を行っています。部会員全員がエコファーマーであり、化学農薬や化学肥料の使用量も熊本県慣行レベルの2分の1以下の使用量で栽培し、特別栽培農産物として出荷しています。

「除草剤を一切使わない」というこだわりから、育苗床では太陽熱消毒を実施し、本圃では黒ポリマルチ栽培を実施しています。植え穴から発生する雑草は人力で除草し、通路や畦畔に発生する雑草は刈り払い機を利用して除草しています。

○「サラたまちゃん」専用肥料の開発

マルチ栽培技術確立するにあたって、追肥が実施しにくいと、チッソ旭肥料(株)と共同で有機質肥料と被覆肥料をブレンドした「サラたまちゃん専用肥料」(写真5)を開発し全量元肥施用で栽培しています。当初は、LPコートと有機質

肥料を組み合わせ、有機率70%の配合でありましたが、厳寒期を越える栽培のため肥料の溶出が不安定でしたので、現在は有機質肥料とLPおよびハイパーCDU肥料を組み合わせ有機率52%の肥料を使用しています。近年は植え付け時期まで高温が続く、暖秋暖冬傾向で推移するため、タマネギの生育が進みすぎ分球や抽苔などが多く発生していますが、ハイパーCDUを使用することにより、植え付け直後の肥効がゆるやかになり、品質も安定しています。

○施肥方法の検討とその効果

従来、施肥は全面全層に実施していました。し

写真5. サラたまちゃん専用肥料



図2. 1年目試験イメージ図

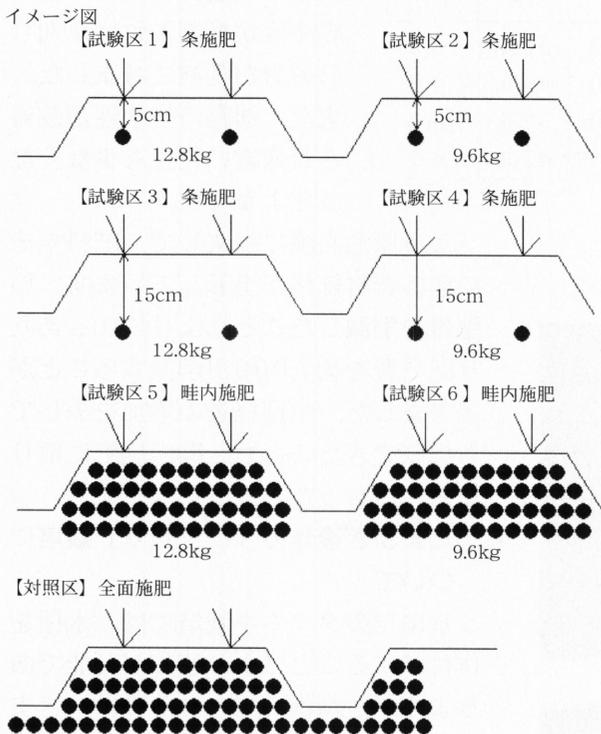
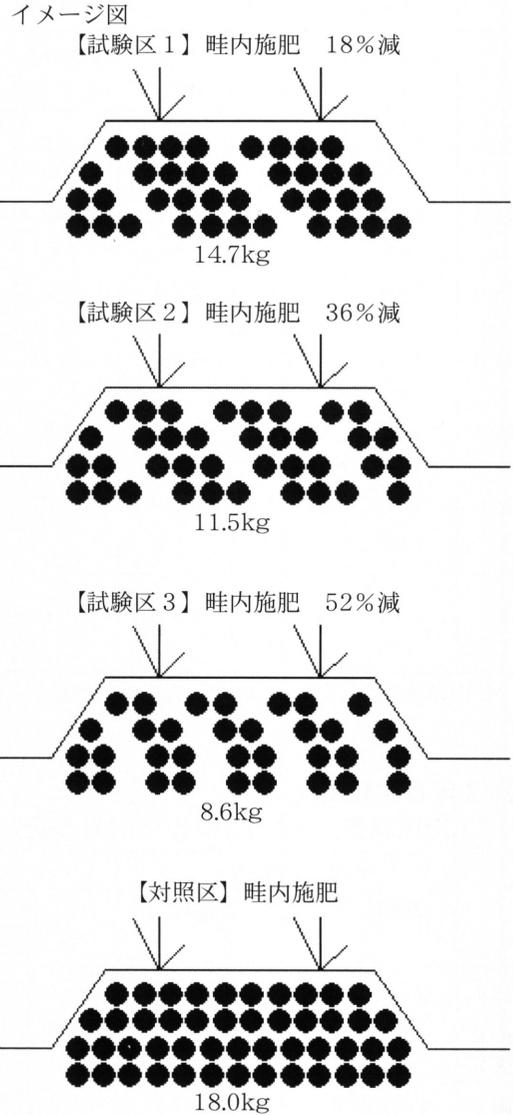


図3. 2年目試験イメージ図



かし、生産者の高齢化および数の減少が進み、省力化が大きな課題となっていたこと、環境負荷軽減のために施肥量の減少が求められていたこと等から、平成17年度から県芦北地域振興局、JAあしきた、サラたまちゃん部会、熊本県野菜振興協会芦北支部が共同で「サラたまちゃん専用肥料」の局所施肥（条施肥および畦内施肥）の試験を実施しました。（図2，図3）

結果は、①畦内部（たまねぎの株下15cm）に条施肥することで、抽苔の発生が抑制され、品質も向上しましたが、収量がやや少なくなることがわかりました。②畦内施肥により施肥量を50%削減しても従来の施肥方法と同等の収量が得られ

表1. 1年目試験結果

(25株調査, 平成18年3月15日調査)

	平均重量 (g)	球径 (mm)	球高 (mm)	球径/球高	分球率 (%)	抽苔率 (%)
展示区1	125 (83)	68.4 (92)	63.9 (92)	1.07	8	8
展示区2	125 (83)	70.7 (95)	65.5 (95)	1.08	0	8
展示区3	140 (93)	72.0 (97)	64.1 (93)	1.12	0	8
展示区4	140 (93)	72.1 (98)	63.0 (91)	1.14	8	8
展示区5	150 (100)	71.8 (97)	66.1 (96)	1.08	8	8
展示区6	150 (100)	72.3 (97)	67.9 (98)	1.06	0	32
対照区	150 (100)	73.8 (100)	68.8 (100)	1.07	16	16

※ () 内の数値は対照区を100としたときの数値

表2. 2年目試験結果

(50株調査, 平成19年3月14日調査)

	平均1球重(g)		等級発生率(%)				
	調査区全て	商品球	商品球		規格外	出荷不可	
			秀	レモン球			
展示区1	250.6(108)	258.8(113)	59.2	2.0	61.2	20.4	18.4
展示区2	243.1(105)	244.0(106)	46.0	4.0	50.0	44.0	6.0
展示区3	213.1(92)	226.8(99)	40.0	4.0	44.0	52.0	4.0
対照区	230.6(100)	229.6(100)	44.0	8.0	52.0	42.0	6.0

※ () 内は対照区を100としたときの比率

写真6. 畦内施肥マルチ機



ましたが、抽苔が増加するため減肥率は30%が適当と考えられました。(表1, 表2)

○畦内施肥マルチ機の開発・導入とその効果

品質向上には条施肥が優れますが、条施肥を実施するには、馬力の大きいトラクターが必要です。水俣・芦北地域の圃場は基盤整備が遅れており、大型トラクターではかえって効率が悪くなってしまいます。そこで、(株)クボタと共同で、畦内施肥マルチャー(商品名:TA10畦内施肥畝マルチ)を開発しました(写真6)。小型(10PS)の管理機にマルチャーと施肥ホッパーを組み合わせており、狭い圃場でも1行程で施肥, 畦立て, マルチの作業を実施します。現在, 当地域では23台が稼働しています。

「サラたまちゃん専用肥料」の施肥量を30%削減しても、慣行栽培とほぼ同等の収量を得ることが出来、おまけに通路に生える雑草の生育が抑制され、草刈りの労力が削減されました。また、通路の排水性が改善され病害の発生も少なくなったようです。

最近原油高騰に由来して、肥料やその他の資材価格が上昇しています。施肥量を削減したことにより、10aあたり肥料費を約7,000円削減することが出来ました。生産経費の増加を少しでも抑制できたことも、畦内施肥に取り組んで良かったと思っています。

○たまねぎ後作の「ひまわり」栽培について

水田でのタマネギ栽培では、水稻を作付けすることにより連作が可能ですが、畑作の場合はそうはいきません。また、夏期に何も作付けしない

と雑草が繁茂し、たまねぎ作での除草作業がたいへんです。そこで、緑肥の効果を期待して「ひまわり」の作付にも取り組みました。品種は景観種の「ハイブリッドサンフラワー」を用いました。たまねぎ収穫後の圃場に6月上旬には種すると、草丈1.5m以上に伸張り、8月のお盆の時期にきれいな花を咲かせてくれました。近所の保育園の園児も大喜びで「ひまわり迷路」(写真7)を楽しんでくれました。翌年のたまねぎの作柄も良く、畑圃場での土作りの一つとなっています。

写真7. ヒマワリ迷路

